

一、常不輕菩薩

ある時、お釈迦様は、得大勢菩薩に語って次のように告げられました。

「得大勢よ。往古、無量無辺不可思議阿曾祇劫というはてなき昔に一人の仏がこの世にお出ましになった。威音王仏がそれである。時を離衰と名づけ、国を大成と言った。威音王仏は教を説き、苦をはなれて、無上正覚に至る道を示し、一切衆生の智慧の眼を開いてお救いをお示しになった。

得大勢よ。この威音王仏が教化を終わってこの世を去られてから後も、やはり同じ名の二万億の仏が出られたのであった。

得大勢よ。最初の威音王仏がこの世を去られて、この教えも漸く光うすれて、ともすれば、傲慢なる僧侶がはびこつて来た時、ここに一人の菩薩が現れた。常不輕菩薩がそれである。常不輕は、僧や在家の行者を見れば、誰をでも礼拝讃嘆して、こう言つた。

「私は深く、あなた方を敬います。決して輕慢致しません。なぜならば、貴方がたは皆、尊い道を行じて、仏におなりになる方であります。」と。

この常不輕菩薩は、經典を読むことを専らにしないで、ただ礼拝するのであった。遠くに、僧尼、在家の行者を見ても、直ちにこれを礼拝し、讃嘆して、

「自分はあなた方を敬えて輕んじない。あなた方はやがて仏となられるお方でありますから。」というのであった。僧尼や、在家の行者の中には心の曲がつた悪い者がいて、悪口罵詈して、

「この愚かな僧は、何処から来て、——自分はあるあなた方を輕んじない。あなた方は当に仏となられるのだから——という言葉を授けるのであろう、我等はかかる虚妄の預言を聞きたくもない。」という者もあった。けれども長い年月、罵られても怒らずに、おきまりのように、「貴方は当に仏陀とおなりになります。」というのであった。更に悪い人たちは、杖で打擲しようとしたり、瓦や石をなげつけたが、遠くさけて猶、高声に、「私は敬えて貴方がたを輕んじはしない。貴方がたは、やがて仏になられるお方だから。」

そこでこの増上慢の僧たちは、彼に常不輕という名をつけた。この常不輕は、臨終に際して、虚空から、威音王仏がさきに説かれた法華經二十万億の偈を聞いて受け取り、眼、耳、鼻、舌、身、意、等六根の清淨なることを得、また寿命を増して、多くの人にこの経を説かれた。さきに、常不輕菩薩を輕んじて悪口雑言した人たちは、今やその徳を知り、心から信服してみ教に随つた。

彼は命終わつてからも、多くの仏に値い、この経を説いた。

得大勢よ。この常不輕菩薩はかように道を行じ、諸仏を供養し、讃嘆し、善行をなし、経を説いた功德によつて仏となることが出来た。

得大勢よ。その常不輕とは誰であろう、この自分、釈迦その人であった。」

静かに思ひますと、現代は、学問の出来るお方も、頭の進んだお方も、腕のたつお方も、口がよくきくお方も、満ち満ちていられますが、一切を拜んでゆくという人が

一番少ないのではありますまいか。静かに、常不輕菩薩のみ心を念じないではいられません。全てを拝むような者は愚者と言つて罵られるかもしれませぬ。その愚者が、今の世には少ないのではありますまいか。仏様の道は、合掌の心と相の中から開けて来ます。